離婚話を我流のコミュニケーション論から観ると…

「熟年離婚」というのはマスコミ報道上のことと思っていたが、あに図らんや重なる時は重なるもので、最近、知人たちも該当するよう。

自分は案外冷たいのか、元の鞘に収める気は毛頭なし。

鞘に収めるよりも、先の HP 記事「究極のところで側に居てくれる人の存在感こそ、信頼感（「雑学ＢＮ」の随想等関係（Ⅵ）、2008.05.08.：参照）」で触れたように、まして夫婦であるだけに、究極のところでお互いが支え合う存在でないと感じるようになったのであれば別れ話も仕方ないと思う。

熟年離婚だけに子どもの養育の問題もないだろうし、（年金も含め）共有財産分配のゴタゴタもあるのかも知れないが、早くすっきりした方がよかったのでないかとさえ思う。

離婚経験者は、「結婚話より離婚話の方が、エネルギーが要り、しんどい！」ことのようだが、確かに日頃そう親しくもない自分に話にくる程だからそのよう。

自分はコミュニケーション論をライフワークとしているだけに、離婚話もついコミュニケーション論の観点から観てしまう。

夫婦は、社会的集団としての人間関係の日常の最小単位とも云える。

増して日々の生活を共有するだけに、究極のところに信頼感が抱けなくなり、そこにコミュニケーション（相互輔生）がないのであれば、社会的集団を維持する必然性もない。

なぜなら、教育等で、互いが影響し合い、成長する要素があるからこそ「集団」が必要になるのであり、集めても単に勝手に振る舞わせるだけなら、それは「群衆」に過ぎないと云う持論から拡大解釈して、(^o^)

また、家庭という営みに互いに生きる元気を貰える心の居場所がないのであれば、一人の人間として社会に悠々しくチャレンジして行くのも、もどかしくなるだろうなあと推測する。

結婚前の若者たちに授業の中で、サン・テクジュペリ（「星の王子さま」の作者）の「結婚とは、見つめ合うことでなく、同じ方向を見ること。」の言葉を紹介しているが、改めてその語りの必要性を感じた。

それにしても、知人の心労の離婚話すら、コミュニケーション論に絡ませて考えるマイペースな自分に苦笑する、m(_ _)m

阿部幸泰　　（2008 年 5 月 11 日　記）